九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

セラヱヴ事件に對するセルビア政府の責任

大村，作次郎

https://doi.org/10.15017/2344428

出版情報：史淵. 7, pp.53-82, 1933-06-30. 九州帝国大学法文学部
バージョン：
権利関係：

セラエヴ事件に對するセルビア政府の責任

大村作次郎

一九一四年六月二十八日の、ボスニアの都セラエヴに於けるオーストリア皇儲及び同妃暗殺事件が、世界大戰勃發の導火線と成り、最近史上最も重要なる事件の一つなる事は言を俟たない。故に、此の事件の原因を探求し、其の責任果して何れにありやを明確にする事は、大戰原因論に於ける最も重大なる任務の一つである。然るに從來此の事件の眞相を見極める事は頗る困難なる狀態にあつた。大戰中に於ける、ドイツ、オーストリアに對する反感、セルビアに對する同情は、種々なる風聞や宣傳と相俟つて、事件の眞相を全く曖昧の中に葬り去つて居たのである。殊に、講和會議に於て、アメリカの Lansing の主宰した "Commission on the Responsibility of the Authors of the War" が其の報告に於て、セラエヴ事件に對しセルビア政府の責任全く無き事を決定し、此の主張が永く世界の輿論を欺き來つたのである。

然るに其の後、種々なる暴露が發表され、事件の秘密の幕は次第に剝がるゝに至つた。之に關しては、S. B. Fay, The Origins of the World War. Vol. II. が詳述し居る。暴露のトップを切つたの

は、ベルグラードに於ける史學教授 Stanoje Stanojewitsch の「オーストリア皇儲フェルヂナンドの暗殺」(Ubistvo Austriskog Prestolonasledniika Ferdinanda. Belgrade. 1923. German trans. Frankfurt. 1923) であつて、著者は、セルビアの二大結社なる「國防」(Narodna Odbrana) 及び「統一か死」(Ujedinjenje ili Smrt) の成立を述べ、特に後者は通常「ブラック・ハンド」と呼ばれる、頗る革命的な秘密結社であつて、其の指導者は實にセルビア參謀部情報局長 D. Dimitriewitsch で、此の人物こそが、セラエヲ暗殺事件の蔭の指揮者であつた事を明かにして、世を驚かしたのである。次いでユーゴースラヴのジャーナリストなる B. Jevtitsch は其の著 Sarajevski Atentat. Sarajevo. 1924. に於て、自分は暗殺計畫に就て凡てを知つて居たのであるゝ發表し、其の詳細を述べたが、主として セラエヲに於ける實行其のものに關し、セルビアとの關係に就ては餘り云ふ處が無かつた。最もセンセーションを起した暴露は、大戰當時のセルビア文部大臣たりし Ljuba Jowanowitsch の發表であつて、大戰勃發十周年記念として一九二四年にベルグラードに於て發行された「スラヴ人の血」(Krv Slovenstva) の中の一論文「一九一四年の Widowdan (六月二十八日) の後」に於て、當時セルビアの Paschitsch 内閣は暗殺の計畫を約一月前より知つて居たに拘らず、之を阻止すべき有效なる手段を敢へて取らなかつた事を暴露して、一世を驚倒せしめ、多數のセルビア人及びセルビア同情者を痛く憤激せしめた。セルビアに關するフランスの一權威なる A. Mousset の如きも之に反對し、特にイギリスに於ける有名なるバルカン史學者 R. W. Seton-Watson は其のセルビア愛護熱より、上述の

ヨヴノギッチの暴露を信じ得ず、一九二五年四月の Foreign Affairs 誌上に於て、「歐米の輿論は、曾てよりも強く大戰責任の問題に興味を有し、ヨヴノギッチ及びパシチ兩氏より充分且つ詳細なる說明を要求する權利有り」と述べた。其の後間もなく自らセルビアに赴き直接聞く處有らんとしたが、それは不成功に終つたやうで、彼は同年五月十三日の Zagreb Obzor 紙上に公開狀を發し、自分がベルグラード政府にヨヴノギッチの暴露に關する說明を要求してより、既に二月以上を經るに未だ何等の返答を得ず、と述べて詰問した。之に對しセルビア政府は何等の返答を與へず、依然其の沈默を守つた　ベルグラードの新聞が、政府は大戰の起源に關する新「青書」を公表するに決したと告げ、Seton-Watson もロンドン・タイムスに更に書を發し、此の文書公表迄批判を差控ふべきであるとしたが、彼の期待に反して文書の公表は實行されずに終つた。彼は如何にしてもヨヴノギッチの暴露を信じ得ず、而かもセルビア當局よりの何等の說明も出て來ないと云ふ事實に直面し、遂に彼の重要なるセルビア辯護の書 Sarajevo. London. 1925. に於て、其の第六章「犯罪の責任」に「ヨヴノギッチ氏の暴露」なる附錄を加へ、ヨヴノギッチは眞の事實を誤表したもので、之に對し大戰當時の彼の閣僚達は公然と彼の虛言を非難するを差控へて居るのだ、との巧妙なる結論を作出し、彼は自己の重要性を誇張せんとする政治家のタイプで、ベルグラード政府が革命運動に同情して居た事を示してボスニアの青年の支持を得、以て自己の政治的勢力を增大せしめんと欲したのだと論じた。

此の間、ヨヴノギッチの暴露が獨英米の諸國に於て大なる注意を引き、セルビアの立場漸く不利と

なり來つたを見て、セルビアの新聞の若干はヨヴノギッチを賣國奴なりとして攻擊し始めた。故に彼は自衛の爲 Novi Zivot 誌に論說を連載して自己の立場を辯明し、余は單に一九一四年に凡ての人に本質的には既に知られし事を記したに過ぎないと主張した。これは確かに事實で、秘密結社「ブラック・ハンド」の活動なるものはセルビア人には充分知られて居た事で、たゞそれが協商列强に於て全く知られて居なかつたに過ぎないのである。

ヨヴノギッチの暴露問題は、政黨問題と合して激しい論議を惹起した。一九二六年二月二十六日、農民派の Jowan Jowanowitsch は議會の豫算委員會に於て、ヨヴノギッチの暴露によつてセルビアの名譽は毀損された。故にパシチ氏はセルビアの名聲の爲に發言する處あるべきであると主張した。又 Jelenitsch 教授の如きは、ヨヴノギッチを賣國奴なりと痛烈に非難した。斯くて遂に四月二十五日、急進クラブの委員會に於てパシチは其の口を開き、ヨヴノギッチが其の暴露に於て述べて居るが如き事を彼は當時閣議に於て述べた覺えはないと主張し、ヨヴノギッチを黨より放逐せんと試みた。之に對しヨヴノギッチは、暗殺計畫に關しパシチが閣議に於て述ぶる處があつたと自分は發表したのではない、私的會談に於てゞあつたと主張し、事の眞相を確める爲に文書及び證據を自ら提出したい、但しそれには首相、外相が責任を負はれたいと要求した。之に對し兩相は、より不利なる秘密の暴露されん事を恐れて、ヨヴノギッチの要求を拒絕した。斯くの如きは、セルビア政府が如何に脛に疵持つ身を自覺して居るかを示すものである。

斯くて Fay 教授は、ヨヴノヴィッチの一九二四年に於ける暴露の正確性を疑ふべき何等の充分なる理由なきが如しと結論して居る。

其の他、オーストリア軍が大戰中ベルグラードに於て獲得した二千餘の文書、或は一九一七年六月の「サロニカ裁判」（上述の秘密結社ブラック・ハンドの指揮者デミトリエヴィッチを銃殺に處した裁判で、表面の理由は、彼が當時のセルビヤ皇儲 Prince Alexander 暗殺の計畫を爲したにあるが、事實は時の首相パシチが此の勢力ある政治上の反對者を除き去る爲であり、且つ又彼の國を永久に閉ぢてセラヱヲ事件に於ける彼の暴露を不可能ならしむるが爲でもあつた。）の記錄なる Tajna Prevratna Organisacija : Izvestaj sa pretresa u vojnom sudu zu offizire u Solunu, po beleskama vodjenim na samom pretresu. Solum Stamparija "Velika Srbija," 1918 (A Secret Revolutionary Organization; Report of the Trial at the Court Martial of Officers at Salonica, from Notes Taken at the Trial Itself. Salonica Press "Great Serbia," 1918.) の如きは、セルビアの二結社の革命的活動を明示するものである。特に後者は、セルビア政府に不利なる材料を頗る多く有して居る爲に、其の後全く禁壓され、現在ではその寫しを得る事すら殆んど不可能とされて居る。併し大戰原因論者によつて大いに研究され、最近セルビア文書集を自ら公けにした Boghitschewitsch の如きは、數々の重要なる論文を發表したのである。其の著 Le procès de Salonique, juin, 1917. Paris. 1927. は、彼の研究の綜合として重要である。

以上述べ來つた諸材料によつて、大戰の直接原因たるセラエヲ事件の眞相は大いに明かにされるゝに至つた。而してこれが研究に於て最も重要なる貢献を爲したのは、ドイツに於ける大戰責任論の專門雜誌なる Berliner Monatshefte であつて、此の問題に關係したセルビア語による、諸發表或は新聞の諸論說の重要なるものは多く同誌によつてドイツ語に於て紹介され、學者の研究を助ける事最も大であつた。Fay 教授の著は、其の脚註に同誌所載の多數の紹介、論文を引用して居る。又アメリカの Current History も此の點に於て貢献する處大であつた。齋藤斐章教授は、同誌所載の論文を利用して著はされた「世界大戰の責任を負ふべきは果してドイツ國なるか」（三宅博士古稀記念祝賀論文集）に於て、セラエヲ問題に於けるセルビアの責任を論じて居られる。教授の此の論文は、其の「修正派史家」的色彩を有した點に於て、ドイツ史界の注目を受け、Berliner Monatshefte 誌は其の一九三〇年四月號に、Die Festschrift für den japanischen Historiker Dr. Yonekichi Miyake. Stimme eines Japaners zur Kriegsschuldfrage. と題して、該論文を紹介批評した。日本の史學者の論文で外國の注意を受けたものは稀であると思ふから、此處に記しておく。既述の Seton-Watson の Sarajevo. がセルビア辯護の書であるに反し、同じくイギリスの E. Durham 嬢の The Serajevo Crime. London. 1925. は、セルビアの責任を追及して居る。Fay の著亦、セルビアの責任を最も學者的に詳論して居る。ドイツの史家は勿論大部分反セルビア的であるが、Die Hapsburger und die Südslavenfrage. Belgrad-Leipzig, 1924. Aus der Welt der Südslaven. Frankfurt. 1926. の著を有する H.

Wendel は親セルビア史家として異彩を放つて居る。尙ほ最近イタリアより出た L. Magrini, Il Dramma di Seraievo. Origini e Responsabilità della Guerra Europea. Milano. 1929. は、大戰の直因全體を扱つたものであつて、セラエヲ事件に關しては、ドイツ側の研究に基いてセルビアの責任を論じて居るが、オーストリアの態度を實際以上に侵略的に述べて居る。

最近公刊された、Hans Bauer, Sarajewo : Die Frage der Verantwortlichkeit der serbischen Regierung an dem Attentat von 1914. Stuttgart. 1930. は、從來の諸史料、文献を綜合して、此の問題に於ける先づ決定的なる意見を示すものとして大いに重要である。勿論著者がドイツ人である以上、セルビアの責任を追及するに餘り急なる點もあるが、こに角永く曖昧の中にあつた此の問題を、主として本著によつて以下敍述するのも、强ち徒事ではないと信ずる。因みに、これも最近ロシアより唯物史觀的見地に立つ新研究 N. P. Poletika, Saralvskoe ubijstvo. (Der Mord von Sarajewo. Untersuchung zur Geschichte der österreichisch-serbischen Beziehungen und der russischen Balkanpolitik in der Periode von 1903—1914). Leningrad. 1930. が出、世界大戰は資本主義的經濟帝國主義の不可避的結果なりこの主張の下に論じて居る。

一、序　論

一九〇三年六月十一日 Obrenowitsch 家のセルビア國王アレクサンドルは、國民輕侮の的であつた

王妃 Draga と共に宮殿に於て暗殺され、Karageorgewitsch 家のピーター即位するに至つた。

之に對しオーストリア政府は翌日 "Frendenblatt" により、セルビアの王位更迭はオーストリアの關する處に非ず、同國との親善關係を依然欲するに止ると宣せしめたが、イギリスは其の道德的見地より、漸く一九〇六年に至つてセルビアとの外交關係を復活した。ロシアはオーストリアに稍々遲れて新國王を承認した。正統主義を主張し、革命的事變を最も厭ふべき塊露兩國のみが進んで、セルビアの王位更迭を承認したのは、勿論これによつて新國王の好意を得、自國の勢力を强めんが爲であつて、事實其の後兩國の競爭は續いたのであるが、セルビアがロシアに走ると云ふ事は本來既に此の時決定したのである。何とならば、此の王位更迭はそれ自らセルビアの政策轉換を意味して居た。先のアレクサンドル王がロシアによりもオーストリアに親しみ、全南スラヴ人を統一せんとする重要なる使命を忘り、其の國力を弱めたに對し、新國王を擁した一派は大セルビア主義の實行を期せんとした。これ今後のセルビアの政策を "Gegen Wien ! für Petersburg !" の傾向を取らしむべきであつた。

上述の國王暗殺に重要なる役割を爲した二人物、一は若き參謀部士官 Dragutin Dimitriewitsch 他は自ら王妃の二兄弟を射殺した Voja Tankositsch 中尉こそは、今後大いに活動すべき人物であり、一九一四年の事件に重大なる關係を有するに至るべきものであつた。新內閣を作つた急進黨の出現も亦今後のセルビヤの運命に重要なる意義を持つた。十九世紀の六、七十年代に多數のセルビア革命主

義者がスキスに集り、バクニン、クロポトキン等の思想を奉じた。一八八三年のミラン國王に對するZajecar 叛逆に彼等は責仕を有して居る。併しスキスに在る凡ての青年セルビア人が斯かる過激革命主義を奉じた譯ではない。Nikolaus Paschitsch の一派は、漸次的建設を主張し、イタリアの國民統一に依つて、セルビアをして「バルカンのピエモン」たらしめんとした。斯くて、一八八一年ミラン國王がオーストリアと秘密親交條約を結んだ其の時に急進黨を組織し、一月八日の機關紙 Samouprava 第一號に於て其の綱領を次の如く告げた。

吾人の國家組織の目的として吾人は、內的には國民の安寧と自由、外的には國家的獨立とセルビア民族の他の部分の統一を思惟す。……吾人の國家的獨立の維持と吾人の對外的使命の充足の爲に、吾人の國民軍隊の形成と武裝の組織に最大の注意を拂ふべきなり。……セルビア民族の分裂し且つ解放されざる部分を文化的に援助し、遠隔の且つ外國の勢力下にあるセルビア人の地域に於て、吾人の國民統一の生氣ある意識を喚起せしむべし。

此の急進黨の首領たるパシチは、其の後永い間ミラン、アレクサンドル兩國王の親墺政策に強い反對を表明し來つた。彼にとつては、ロシアはセルビアの唯一の希望であり、オーストリアは最大の敵であつた。而かも今や軍隊が彼及び其の黨派に道を開き、ヂミトリエヂッチを首長とするグループが軍隊に於て最大の勢力を得た。重要なる官吏は凡て急進黨に屬し、首領パシチは一九〇六年より首相と成るに至つた。此の兩勢力を結ぶものは勿論大セルビア主義であるが、ヂミトリエヂッチの一派が

非法的暴力行爲を好むに反し、急進黨は比較的温健なる運動を取つた。兩派が權力を望むや、外的にはセルビヤ國家の爲に、內的には自らの爲にであつた。前者は兩勢力の協同的行動に、後者は激しい敵對に向はしむべきであつた。此の兩勢力の關係こそ今後のセルビアの歷史に最も重要なる意義を有するものである。

二、大セルビア運動（セラエヲ事件の前提）

上述の如く一九〇三年の王位更迭によつて、セルビアの親露反墺なる政策轉換は決定されたのであるが、尙ほ二個の事情が、オーストリアと直ちに爭ふを不可能ならしめた。第一に、スラヴ民族の地域の若干が尙ほトルコの支配下にあり、此の問題を解決するが先づ得策であつた。第二に、當時ロシアは極東政策に熱中し、セルビア單獨ではオーストリアに對して何事をも爲し得なかつた。

然るに、日露戰役の結果ロシアが極東侵略の道を阻止されて、再びバルカン進出に立歸つた事は、セルビアにとつて頗る有利であつた。斯くて日露戰役の國際史的意義は吾人として大いに考察に値する。一九〇六年にイギリスとの外交關係も正式に復し、セルビアの對協商國關係は大いに良好となつた。此の事は、大セルビア主義の渴望の的たるボスニア、ヘルチェゴヰナをオーストリアが、ベルリン會議以來の占有の形式を一九〇八年併合の形に變じ、所謂ボスニア外交問題を惹起した時に明かとなつた。即ち、此の問題に對するセルビアの抗議に關し、ロシアはイギリス、フランスを味方として

之を援助しオーストリア、ドイツに對抗したのである。然し當時三國協商は尙ほ充分に强固でなく、殊にロシアが日本より受けた戰敗の傷未だ癒えず、到底オーストリアと戰ふ軍力を有しなかつたので、セルビアも遂に屈するの止むなきに至り、一九〇九年三月三十一日次の聲明を發した。

セルビアは、ボスニア、ヘルツェゴヰナに於て作られし事實が其の權利に觸るゝ事なく、從つて列强がベルリン會議第二十五條に關して爲せし決定に從ふべき事を承認す。列强の忠告に從ひ、セルビアは、併合に關し前年秋より取りし抗議と反對の態度を今後放棄し、更に將來オーストリアと親善關係の立場に生きんが爲に、同國に對するセルビヤの現在の政策の方向を變ずべき義務を有するものなり。

斯くてオーストリアとしては、セルビアの反墺政策の放棄と云ふ事に一個の法的要求を有するもので、事實一九一四年の最後通牒の一部分の根據として、上述のセルビアの聲明を利用したのである。然しながらセルビアは決して一九〇九年の聲明を實行しなかつたのである。殊にロシアの援助は益々セルビアをして反墺的ならしめた。露都に派遣されたセルビアの特使 Koschutitsch は一九〇九年三月十九日國會議長 Chomjakow との會談に關して次の如く本國に報告した。「若しオーストリアがセルビヤを攻擊する場合ロシヤは如何なる態度を取るやとの質問に對し、議長は答へて、現在吾人が戰を爲し得ざる事を全世界に表明せし事は、これ曾て如何なる國家も爲せしこと無き事を吾人は爲せるなり、現在吾人は之に干涉し得ざれども、セルビアに對する凡ゆる壓制を吾人はヨーロッパ的火災の

開始と認むべし。若し吾人にして之に干渉し得るに至らば、斯かる火災は將來に燃え上るべし。」斯かる議長の意見は決して彼一人の個人的意見に止らなかつたのである。

斯くてセルビアに於ては、ロシアの軍備充分となる時、オーストリアを挑發して戰を挑むべきである。ロシアは全ヨーロッパ的戰爭を冒してもセルビアを助くるに至らんと考へた。斯くて其後大セルビア主義實現の爲の努力は凡ゆる形に於て止むことは無かつた。其の運動は次第に强烈と成り、目的の爲には手段を選ばざる有樣と成つた。さればセラエヲ事件は、決して特殊單獨なるもので無く、斯かる連續的運動の絕頂點を形作れるに過ぎない。大セルビア運動に關しては豐富なる文獻が存するが、オーストリアの立場を主張するものに、L. Mandl, Österreich-Ungarn und Serbien. Wien. 1911. L. von Südland (Pilar), Die südslawische Frage und der Weltkrieg. Wien. 1918. H. Friedjung, Das Zeitalter des Imperialismus. II. 反墺的立場を代表するものに、T. G. Masaryk, Der Agramer Hochverratsprozess und die Annexion von Bosnien und Herzegowina. 1909. R. W. Seton-Watson, Die südslawische Frage im Hapsburger Reiche. 1913. (Grosse Politik, Bd. XXVI. 1. S. 3)。尙ほ最近、一九一九年ドイツ議會に於て成立し其の後活動を繼續して居る大戰調査委員會 (Untersuchungsausschuss der Verfassunggebenden Deutschen Nationalversammlung und des Deutschen Reichstages) の第一部(大戰前史を取扱ふ)第十卷として、次の如き重要なる著が公けにされた。R. Gooss, Das österreichisch-serbische Problem bis zur Kriegserklärung Österreich-Ungarns an Serbien, 28.

Juli 1914, und H. Wendel, Die Hapsburger und die Südslawenfrage. Berlin. 1930. Wendel の方は最近の文献を利用して居らない舊著で、重要ではないが、最初の Gooss の議論は、全史料を渉獵し、政治的、歴史的、法律的に問題を取扱へるもので、頗る重要なる著である。著者は一九一九年のオーストリア赤書の編纂者として有名で、ドイツに於けるカウツキイと同じ使命をオーストリアにて果した人である。因みに此の書は最近のオーストリア文書集編者の一人なる L. Bittner によつて批判紹介された（Historische Zeitschrift. Bd. 144. 1）

大セルビア運動の實行に當つたのは、二個の結社であつて、其の活動を自由ならしめ、且つ紛爭の際責任をセルビア政府に及ばさないが爲に、結社員を官職に就かしめず、何處迄も私的結社の假面を被らしめたのであつた。斯くて先づ、此の二結社の内容解剖が重要と成る。

Narodna Odbrana（國防）、 最も大で廣く知られたセルビアの結社は上記のものである。而して一九一四年七月末にオーストリアが列强に提出したセラエヲ事件調査の結果なる "dossier" に於ては、單に此の結社のみに責任を歸し、より重大なる後述の第二の結社に及ばなかつたのは、オーストリアとして拙劣であつたとされる。

一九〇八年オーストリアがボ、ヘ兩州の併合を宣言した日、セルビア外相 Milowanowitsch は閣僚及び諸名士を集め、セルビアの取るべき行動を議したが、こに角ベルグラード市長が翌日諸代表者を召集することに決した。而して翌日の會議中に於て此の「國防」協會が成立したのである。オースト

リアに對する憤激は、既に述べた兩勢力を協同せしめ、急進黨の諸名士のみならず、ヂミトリエヰッチ、タンコシッチ等の軍部有力者を包含した。一九一四年に Tschabrinowitsch がオーストリア皇儲暗殺に出發する直前迄雇はれて居た政府印刷局の長官なる Z. Daschitsch 及び M. Pribitschewitsch も會員であつた。後者は、暗殺事件の日セラエヲより、「二匹の馬（塡皇儲及び妃を指す）を巧く片附けた」との電報を受取つたと云はるゝ人物で、彼の弟 Svetozar はクロアシアの議會に於ける最も反塡的なる一人であつた。以て「國防」の如何に反塡的傾向を本來有して居たかを知り得る。

「國防」の最初の目的は、現在のボスニア問題に關し直接オーストリアと戰はんとするにあり、義務兵を募集、訓練し、大いに戰備を整へたのであつた。然るに既述の如く、此の問題はセルビアの屈服に終りを告げたので、本來 Kampfverein であつた「國防」も其の形を所謂文化協會に變じた。併しこれは單に表面的、形式的の事に過ぎないので、親セルビア的諸家が此の變化を以て「國防」協會を無害なるものと主張するは、當らざるの甚だしきものである。

同協會の中央委員會はベルグラードに在つて、主要なる町々に存する地方委員會を監督し、地方委員會の下には區局委員會有り、最も下に、委員會の設置を要せない地方に機密員が存した。同協會の使命に關しては、一九一一年中央委員會より出した小冊子 Narodna Odbrana Izdanje Stredisnog Odbora Narodne Odbrane が明示して居る。之によれば、國民的意識の促進、肉體の訓練、經濟上健康上の幸福、文化の向上、農民、主婦、讀書、社交の諸協會の建設及び其れ等に於ける講演を計畫

し、これ凡て武器を以て立つ戰の準備手段たるに過ぎず、セルビアが準備なくして再び襲はれざらんが爲とされた。Sokolos 會を最大とする多數の既設體育協會或は射擊、乘馬協會を自己の勢力下に置いて、「國防」の從屬機關たらしめた。セルビアの軍隊は單に六箇月耐へるに過ぎない故之を完全にすべしとされた。以上の如きは未だ自衞手段の域を越えては居ないのであるが、大なる準備は「北方より來り、古トルコより更に恐るべく危險多き新トルコ（オーストリアを暗示す）」に對するものであるとし、オーストリアを以てセルビアの最大の敵と認め、ボスニアの獲得を其の目的と公言するに至つては、其の如何に挑戰的なるかを知り得る。

「國防」は其の重要なる仕事を爲すに際し、秘密潛行的方法によつた。之を明示するものは、一九一四年十一月の暗殺犯人及び嫌疑者のセラエヲに於ける正式裁判の速記錄のドイツ譯なる Pharos, Der Prozess gegen die Attentäter von Sarajewo. Berlin. 1918.（筆者幸ひに之を所有して居るが甚大の興味を呼ぶ書である）及び、オーストリアの "dossier" である。"dossier" の作者なる Wiesner は、大戰中ベルクラードの中央委員會より獲得された秘密材料を利用して、Die Schuld der serbischen Regierung (Berliner Monatshefte. Apr. 1928) を著はした。

大セルビア主義の渴望の的がボ、ヘ兩州なる以上、此の地方に該主義を鼓吹し、オーストリアの統治に反對を喚起せしめ、更に戰時の準備を整ふべきであつた。

先づ擾亂の發生地を作り、其の運動が全然ボ、ヘ人民の自發的行動たるかの如く見せんとした。之

が煽動には「國防」は頗る愼重なる行動に出で、諸委員會及び機密員を以てスパイの網を作り、セルビアより國境を越えてボスニアに宣傳文、武器、陰謀家を送る爲の「トンネル」たらしめた。諸體育、敎育、禁酒會協も之に關與した。セルビアの國境警備大尉 K. Todorowitsch が Drina 師團長に宛てた報告は、彼の日記や記錄と共に、大戰の始にオーストリア軍によつて獲得され、此の「トンネル」の內容を明示するものとされて居る。其の報告によれば、彼はセルビア軍相の命令に從つて「機密員」の網を作上げるに全力を注ぎ、「機密員」の活動は表面上敎育、禁酒會 (Pobratimstvo) を廣むるにありとした、これスパイ、密輸、陰謀の實際の仕事を巧みに覆ひ隱す手段とされた。一九一五年十一月より一九一六年三月に亘る Banjaluka 裁判によれば、彼トドロヰッチ唯一人で、"Proswjeta" "Sokol" "Pobratimstwo" 等の協會に指導的地位を有した四十五人のボスニア人と連絡が取られて居たと云ふ。以て、「國防」が所謂文化的事業の假面の下にボスニアの政治的煽動を爲すに、如何に行屆いて居たかを知る。「國防」の有力者達はボスニアを巡遊して、"Wlg von Wien! Hin zu Belgrade!" の宣傳を盛んに爲し、セルビア印刷局長ダシッチの如きはボスニアに於て、協同の敵に對して全セルビア人を統一すべく、オーストリアこそ其の敵であると叫んだのである。オーストリアの領土其のものに於て斯かる演說を爲すこは實に甚はだしい事と云ふべきである。一般人民の煽動よりも更に重要なのは、將來の鬪士の養成であつて、之が爲にはセラエヲ、Tuzla 其他の高等學校は全く陰謀家の巢の如くになつた。セルビアより盛んに革命的文獻が密輸され、特にロシア革命家の書は、ボ

スニア青年に大いに愛讀された。

要するに「國防」は、其の所謂文化目的を公然と遂行しながら、其の裏面に於て全然秘密的に、ボスニアのオーストリアに對する革命の發展を助けたのである。凡ては文書に依らずして行動され、必要の時のみ暗號を使用し、何等差支へない事のみが普通の郵便で通信された。書簡、書籍、武器、爆發物の如きは、全然手から手の秘密傳達に依つた。斯かるセルビアとボスニアの秘密交通は、國境官吏の承認無くては到府不可能である。否、單なる默認以上のものがあり、セルビアの軍相は「國防」と相結び、「トンネル」を通じて、ボスニアより常にベルグラードに報告が送られて居たのである。「國防」に雇はれたボスニアの密輸者の國境通過には、セルビアの稅關吏が之を援助すること大であつた。若し彼等にして之を諾せざる場合は、ベルグラードの本省から之を命令されたのである。例へば Schabatz に於ける「國防」委員長が一九一二年秋、Ratza の稅關吏が「國防」の仕事を援助しない事に對し、ベルグラードに苦情を申込んだ時、軍相は問題所屬の藏相に、該稅關吏をして「國防」會長と協同し此の仕事を助けしむべき事を要求し、藏相は之に應じたのである。

セルビア政府が「國防」の秘密活動を如何に知悉して居たかと云ふ事は次の二例によつて明かである。第一例はボスニア併合事件の時に溯るが、其の時モンテネグロはセルビア公使を通じて爆裂彈の交附を求めた。公使はセルビア外相に報告して、セルビア政府は爆裂彈を處理し得ないが、「國防」が之を所有せる故、之に依賴されたき旨を自分はモンテネグロ首相に述べたと語つて居るのである。

第二例は第一バルカン戰役の時で、ボスニアの「國防」會員が多數トルコに對する戰爭援助の爲にモンテネグロに來つた。然るにオーストリア亦動くべしとの報を得て、彼等は對塁戰に向ふ爲に本國ボスニアに戻るべきか否かをセルビア公使に問うた。公使は其の決定を首相パシチに乞うたが、首相之に答へて、「彼等は本國に戻るべからず、何とならば彼等は直ちに軍法會議に引渡され、オーストリアは人民煽動許容の責をモンテネグロに負はすに至らん」と。

以上述べた如く、「國防」はボ、ヘ兩州のオーストリアに對する叛亂の助長に全力を盡したもので、セルビア政府が彼等の斯かる意圖を知悉し、而かも種々なる形に於て、彼等と協同し、或は援助したのであつて、現在種々なる史料によつて、セルビア政府と「國防」との内的關係は充分に確證され得るのである。表面「國防」をして單に文化目的を行ふ私的協會たらしめたのは、全く世人の眼を覆はんが爲であつたのである。

Uiedinjenje ili Smrt（統一か死、通稱「黑手組（ブラック・ハンド）」）

既述の「國防」協會は、ボ、ヘ兩州の革命助長に潛行的努力を爲したものであるが、更に一歩進んで過激なる實行手段に移る仕事は、他の團體に殘されたのである。これ即ち、より重大なる意義を有する、通稱「黑手組」と云はれた秘密結社である。一九〇八――一九一一年は「國防」の時期であつて、一九一一――一九一四年は「黑手組」の活動期と見られる。

セルビア政府を形作つて居る急進派と、過激主義の軍人派との軋轢は一九一一年迄に漸次現はれ、

軍人派は急進黨の比較的溫健なる政策に飽足らず、彼等の若干は遂に直接手段を目的とする過激なる新秘密結社「黑手組」を組織するに至つた。（過激軍人派の中にも「黑手組」に走らず、急進黨に依然從つた者があつた。彼等は、一九一七年の「黑手組」の崩壞後其の地位を與へられ、通稱「白手組」と呼ばれた）。

此の「黑手組」と先の「國防」との關係が頗る密であつた事は注目すべきものである。例へば、「黑手組」中央委員會の十委員の一人であつた Milan Wasitsch 少佐は同時に「國防」の書記官で、セラエヲ暗殺犯人の言によれば彼等に資金や革命書を給したとされる。「國防」の機密員は「黑手組」の爲にスパイの仕事を爲し、兩結社に共屬してゐた人は多數であつて、其の分離が殆んど不可能であるやうな處が多かつたのである。こに角公けには文化協會として認められて居る「國防」の陰に隱れる事は「黑手組」として頗る有利であるから、其のボスニアに於ける黨員には、依然「國防」が運動の指導に立つて居るものと信ぜしめたのである。而して「國防」の當局者は斯かる狀態に敢へて反對しなかつた。

「黑手組」の活動の內容を明示するものは、其の一九一一年五月九日創立の際の黨則である。これは、既に述べた一九一八年發行のサロニカ裁判の記錄なる Tajna Prevratna Oraganisacija に見らるゝ處であるが、これはセルビア政府が、「黑手組」が急進黨の勢力を覆さんとする單に國內關係の革命結社に過ぎないものであるやうに見せる爲に、國外に於ける其の過激的活動に關する個處を該記

錄より抹殺し、セラエヲ事件との關係を否認せんとしたものである。然るに Boghitschewitsch は「黑手組」の殘存せる二黨員より材料を得て、黨則の完全なる復活に成功し黨員には多數のセルビア文武官吏を有して居た事を暴露したのである。

「黑手組」は、國民的理想を實現し、全セルビアの統一の目的の爲に作られしものなり（第一條）。本結社は智的宣傳よりも兇暴的行爲を可とするが故に、非黨員には絶對に秘密に附すべし（第二條）。第四條、（ロ）、セルビア人の住する凡ての土地に於て革命的活動を組織す。（ハ）、セルビア王國境の外に於て、此の理想に反對するものと全手段を盡して戰ふべし。（ニ）、セルビア及びセルビア的要素に好意を有せる凡ての國家、人民、團體及び個人と親善關係を維持すべし。（ホ）、民族解放と統一に努力せる凡ての人民及び團體を凡ゆる方法に於て援助すべし。第七條、ベルグラードの中央委員會は、セルビア王國の黨員外に、國外のセルビア人の住する土地の各々より一名宛の代表を含む、即ち一、ボスニア、ヘルチェゴヰナ、二、モンテネグロ、三、古セルビア及びマセドニア、四、クロアシア、スラヴニア、シルミア、五、ヲイヲヂナ、六、ダルマシア沿海地方、第十八條、中央委員會は、通例其の委員であり、特別の場合は其の持使である委任代表者によつて、國外の委員會と連絡す。第十九條、國外の委員會には行動の自由を許す、されどより廣汎なる革命運動の實行は中央委員會の承認によらざるべからず。

結社の擴張、秘密の維持、服從の遵守等に關して第二十三條以下色々と規定されて居る。新黨員

は、更に他の新黨員を加入せしむる義務が有り、且つ自己の紹介した者の保證として自らの生命を提供せなければならなかつた。各黨員は相互的に何人なるか不明で、單に秘密番號によつて示され中央委員會のみが彼等の名を知つて居るこ云ふに至つては、全く探偵小說を讀むの觀が有る。結社の利害は最高たるべく、各員は入黨こ共に自らの個性を喪失すべきものこされた。新黨員の入社式も頗る怪奇で、一組の蠟燭の火のみを有する暗黑なる部屋に、黑布で覆はれキリスト磔像、懷劍及び拳銃の置かれてある机の前に、新黨員は引出される。彼の前には假面の人々が居る。斯くて彼は、「余を暖むる太陽、余を育つる土地、余の祖先の血により、余の名譽と生命にかけて、余は今後死に至る迄此の結社の法則に忠實であり、その爲に如何なる犧牲をも爲すべき事を神の前に」誓ひ、此處に始めて彼は「黑手組」黨員こ成る。黨員は彼が公私人こして知り得た事實に關し、結社の使命範圍に屬する凡てを中央委員會に報告すべき義務を有した。中央委員會の命令は之に絕對服從すべきものこされた。一度び入黨した者は決して脫黨を許されず、若し結社を害するが如き行動に出た者は死を以て罰される。中央委員會の死刑宣告は、それが實行されるこ云ふ事のみが重要で、其の方法は問題こされなかつた。故に黨員にして謎の如き死を遂げた者も多數有つた。非黨員に對しても斯かる事は行はれた。故に、セラエヲ暗殺者が其の家に避難したボスニアの農民達は、其の警察官よりも秘密の「黑手組」本部を恐れて居たのである。「黑手組」のシムボルは上圖の如く旗、頭蓋、交叉した骨、懷劍、爆彈、毒藥瓶を並べ立てた頗る不氣味なも

ので、結社のグロ的性質を如實に示して居る。

上述によつて明かなる如く、「黑手組」は「國防」と異り、テロ的傾向を頗る强く有するもので、史上斯かる種類の結社中隨一と云つて然りである。而かも一九一四年にオーストリアが「國防」にのみ責任を歸し、此の重要なる「黑手組」に關して云ふ處無かりしは、彼等の活動が如何に極秘に巧妙に行はれたかを語るものである。

次に重要なのは、「黑手組」とセルビア政府其のものとの關係である。これは、黨員の主要なる人名を列擧する事によつても先づ明かである。首領たるヂミトリエヂッチ大佐はセルビア參謀部情報局長であり、黨員第六號と指示された。副首領格は、「第七號」タンコシッチ少佐、續いて「第四一二號」Milan Ciganowitsch、此の兩名はセラエヲ暗殺の準備を直接助けた人物である。既述の問題となつた暴露を發表した大戰當時の文相ヨヴノヂッチの親友なる、「第一六六號」Duschan Obtrikitsch、セルビア大審院書記官「第四二二號」Michel Givkowitsch、ベルグラード大學書記官「第四七一號」Demetrius Nowakowitsch、外務省書記官「第四〇六號」Milan Gavrilowitsch、鐵道大臣「第四〇一號」A. Jowanowitsch、警察部長「第四〇七號」Bogoljub Wutschitschewitsch、外務省吏員「第四六七號」Stanoje Sinitsch 等の人名を見れば、「黑手組」が如何にセルビア政府其の他ベルグラードの公人と密なる關係が有つたかを推し得る。

セルビア皇儲アレクサンドルも此の結社と深き關係を有し、「黑手組」がその機關紙 "Piemont"

を發刊するや、皇儲は多額の金を之に寄附し、ヂミトリエヰッチを特に優遇したのであつた。勿論後には其の態度を變じ寧ろ結社の絶滅に力を致した。

セルビア行政官の凡ゆる方面に「黒手組」黨員が居り、軍隊が最も強く彼等の勢力下にあつたことは勿論である。而して彼等は政府の處置に反抗する事屢々であつて、それ自ら一個の政府を作れるが如き觀があつた。暗殺犯人が既にセラエヲの地に向つた時、セルビア政府は國境官吏に、彼等を逮捕すべく命じたが、此の命令は何等實行されなかつた。而かも斯かる事實に對し、セルビア閣僚達は之を何等怪しむ事なく、之を探究せんともせず、自明の事として文相ヨヴノヰッチは「されど此等の國境官吏は自ら結社に入り居り（内相）Stojan の命令を實行せざりき」と語つた。

ヂミトリエヰッチは既に一九一一年に外相ミロヴノヰッチに結社の目的を告げ、之に對し外相は「若き友よ、貴下の「黒手組」を余の利用に置かれよ、然らば余が近くセルビアの爲に爲さん事を貴下は見らるべし」と語り、更に多額の金を與へたのである。結社と政府との結合は之に止らず、重要なる問題の實行に際しては中央委員會がセルビア閣僚の何れかに之を打明けて居た事は、ヂミトリエヰッチの言によつて明かである。

「黒手組」は對外的には大セルビア主義の即行を期したと同時に、對内的にはより強大なる權力を欲した。此の後者の點に於ては、「黒手組」は急進黨より成るセルビア政府の敵たるの關係にあつた。故に政府としては、「黒手組」の外的活動援助の爲と同時に、其の内的行動の監視の爲に密偵役

として政府の人間を黨員たらしむる必要があつた。斯くして兩者の關係は密接とは云ひながら頗る特殊なる內容を有するものであつた。上述の報告中に見えた Rankowitsch の如きは政府の密偵黨員であつた。又既述の Milan Ciganowitsch の如きはセラエヲ事件の準備を直接助けた人物でありながら、一九一七年に其の證言によつて「黑手組」の絕滅を齎した。彼は實に「白手組」及び急進黨の間諜であつたのである。

特に政府として監視の必要であつたのは「黑手組」首長ヂミトリエヰッチであつた。彼は才幹と教養を有し勇敢であつたが、野心に富み雄辯で、軍人士官には異常なる勢力を持つた。人心收攬に巧みで、結社組織の仕事に勝れて居た。秘密活動を好み、目的の爲には全く手段を選ばず之に邁進し冒險と神秘を愛した。彼は靜安を好まず、常に陰謀と暗殺を計畫して居た。一九〇三年にはアレクサンドル王暗殺の主謀者の一人であり、一九一一年には墺帝或は皇儲暗殺を計り、一九一四年にはブルガリアの秘密結社と共にブルガリア國王フエルヂナンドの暗殺を計り、更にセラエヲ事件の計畫を指導した。一九一六年には更にギリシア國王コンスタンチンの暗殺を計り、更にセルビア皇儲に對する陰謀をも計つた。彼の生涯は實に陰謀と冒險と秘密に終つて居ると云ひ得る。彼は一九一三年六月にセルビア參謀部情報局長と成つたが、これ彼にとつては恰好の地位であつて、「黑手組」首領であり、セルビア情報局長である此の公私の二重資格は相助け合つて彼の行動を有利ならしめた。斯くの如き事は彼のみに止らず、例へば一九一一年にトルコ及びオーストリアに對する國境に國境士官が設けられ

た時、其の六名の凡ては「黒手組」の黨員であり、或はそれと成つた。而して其の一人なる既に述べた Todorowitsch 大尉の如き、果して彼は「國防」會員、「黒手組」黨員、セルビア士官の何れの資格で行動したか之を區別するに苦しむのである。とに角セルビア政府かヂミトリエヰッチの如き危險なる人物を重要なる地位に就かしめたのは、寧ろ彼の陰謀欲を利用せんが爲であつた事は明かで、此の點政府として彼に對する責任を免れ得ないのである。

ボ、ヘ兩州其の他セルビア人の住むオーストリア領土に於ける革命煽動は、既に結社の創立と同時に行はれて居た。其れ等の地方の各大學や青年クラブに於ては「黒手組」の勢力は絶大と成つた。彼等セブルの青年達はセルビア國内に招かれて一層煽動を受けた。一九一二年四月百七十六名の學生が Agram からセルビアに旅行したが如きは其の顯著な例で、今日ユーゴー・スラヴ統一の「ワルトブルグ祭」と呼ばれて居るが、其の時學生達はセルビア諸大臣の歡待を受け、觀兵式が彼等の爲に行はれ、國王ピーターは此等オーストリアの臣民を「クロアシアの兄弟」と呼び、彼等も亦セルビア國王を「ユーゴー・スラヴの王」と呼んだ。最後に餐宴が行はれ、之にヂミトリエヰッチは訪問學生の若干を招き彼等を「黒手組」黨員たらしめたのであつた。

ボスニアに於ける革命運動の發展に最も重要なる意義を有するものは Gatschinowitsch である。彼はヘルチェゴヰナの一僧侶の子で、父は彼を同じく僧侶たらしめんとしたが、彼は其の勉學を棄てゝロシアの革命文獻を耽讀し、一九〇九年の春ベルグラードに赴いて「國防」の有力者達と交はり、二

年間セルビアに止つて熱烈な反墺思想家 Skerlitsch の影響を受けた。其の後「國防」の派遣使としてボスニアに戻り、次いでキーン大學に學ぶ傍ら、革命運動の組織に熱中し、一九一〇年六月十五日セラエヲに於て總督 Varesanin 將軍を射つて失敗し自殺した Zerajitsch の頌德文を匿名にてベルグラードに於て發行しボスニアの青年達に偉大なる感化を及ぼしたのは此の時であつた。一九一二年再びベルグラードに至り、「黑手組」に入黨し「第二一七號」と成つた。彼は兩結社より資金を受け、且つセルビア外務省宣傳局から給費金を得てローザンヌに赴き、此の地でトロッキイ其の他のロシア革命家と交つた。此の間彼はボスニアを巡歷して Mlada Bosna（青年ボスニア）の過激なる若人を以て、"Kruzhoci" なる秘密結社を組織するに至つた。これは「黑手組」と全く同樣の性質のもで、其の黨員は必ずしも「黑手組」黨員ではなつたが、ボスニア其の他の地方に於ける散在せる「黑手組」黨員を統一する網の役目を爲し、且つ「黑手組」の活動を援助するものであつた。本稿の初に指摘した Jevtitsch の主張によれば、墺領バルカン地方の革命運動及びセラエヲ暗殺事件の源は實に此の Kruzhoci に存したのである。

革命思想を有するボスニアの青年達が、オーストリアの監視嚴しいボスニアに於て快からず、より自由で親しいベルグラードに赴かんと欲するのは當然であつて、所謂 "émigrés" と成つた。此等若き émigrés はベルグラードの諸カフエを根城とし、「國防」「黑手組」の連中と交はつた。最も繁く往來したのは Komitadschis（不正規兵）の連中で、若人の煽動にこれ力め、自己の同志たらしめ

たのである。

上述の如くボスニアに於ける革命運動の宣傳は頗る激しきものがあつた。而して直接行動も之に遲るゝ事はなかつた。一九一〇年六月十五日ヘルチェゴヰナの學生 Zerajitsch がボスニア總督に五發の銃彈を發射して失敗した事は既に述べたが、彼は後に「黑手組第一一一號」と成つたセルビア士官 Bojin Simitsch より拳銃を得、其の練習を受けたのであつた。既述の一九一二年に於けるアグラムの學生のベルグラード訪問の際、アグラムに於けるハンガリアの長官 Von Cuvaj に對する暗殺が決議された。此の計畫は既に此の年二月にセラエヲに於て、Tartaglia, Lukas Jukitsch の間に話されたのであるが、實行には至らなかつた。今や其の議熟し、此の兩名はヂミトリエヰッチに計畫を語り、彼は之に贊成して其の準備を彼の腹心たるタンコシッチ少佐に委した。Jukitsch は少佐より拳銃及び爆彈の使用法を習ひ、武器を受けたのである。彼は拳銃を携へてアグラムに赴き、爆彈傳送の爲に「トンネル」の一つが用ひられた。彼は一九一二年六月八日長官暗殺を實行したが、二人の他の官吏を殺害するに止つた。

次いで一九一三年八月十八日墺帝の誕生日にクロアシアの總督 Skerlecz 男の暗殺が行はれたが、更に翌年五月二十日に再び遂行された。主犯者 Rudolf Hercigonja は、一九一二年秋 Jukitsch の解放を試みて失敗し、セルビアに逃れて「黑手組」の同志と成り、アグラムに歸つて陰謀を計つたのであつた。

以上を通じて犯人が常にオーストリア臣民である事は、親セルビア論者が以てセルビアの無責任の證左たらしむる處であるが、事實は反對に、彼等暗殺者は常にセルビアより其の革命思想を受け、セルビアに於て其の計畫が成熟したものである。暗殺の決意はセルビアより發し、武器も亦セルビアより出たのであつた。

第五の暗殺たるセラエヲ事件は實に以上の諸事件の連續であり、絶頂であつた。他の暗殺事件が凡て「黑手組」と關係が有つたに反し、墺皇儲の暗殺はヂミトリエヴッチ個人の計畫に基くものであつた。此の點に就ては諸說一致して居るが、其の計畫を何時決意したかと云ふ問題に就ては意見一致しない。Stanojewitsch が斯の一九一四年六月十二日の Konopischt に於ける獨帝と墺皇儲の會見を以て、ヂミトリエヴッチの決意の機會とせるは誤りである。即ち、此の會見に於て兩者はセルビア絶滅戰を決定し、ヂミトリエヴッチは此の事をロシア參謀部より聞いて、遂に皇儲暗殺を決意したと云ふにあるが、事實に於ては既に此の時迄に暗殺の準備は成り暗殺者はボスニアの地に在つたのである。尙ほ此の傳說的なコノピシュト會見に就ては Fay が啓蒙的敍述を爲して居る。Wiesner はスタエヴッチの主張を頗る善意に解釋して、彼は一九一三年十月の獨帝、墺皇儲のコノピシュト會見を云つて居るのだと考へたのであるが、これ勿論成立せざる假定である。斯くてスタエヴッチの主張は、セラエヲ事件を獨立的のものとみなし、其の原因をオーストリアの側に歸せんとする考へより出たものである。要するにヂミトリエヴッチの皇儲暗殺の考へは、決して偶發的なるものでなく、從つて何等かの

の特殊事件が其の原因と成つたものではない。オーストリアの高官暗殺を「黒手組」が屢々實行し來り、其の最も高位のものとして彼が皇儲を選んだに過ぎない。暗殺動機の源は反墺的大セルビア主義に求めらるべきである。而かも皇儲が始めてセラエヲの地をセルビアの國民祭なる Widowdan（六月二十八日、一三八九年の此の日に Stephan Duschan の建てた大セルビア國が Kossowo の戰に於てトルコの爲に壞滅）の日に踏むと云ふ事は、場所と云ひ日と云ひ皇儲暗殺には好適であつた。皇儲のボスニア訪問は彼等大セルビア主義者にとつては一個の挑發行爲と解され、これのみにしても復讐に値するとされた。

然し暗殺の計畫には尙ほより深い政治的根據がある。抑々皇儲フェルヂナンドの政治思想は頗る明かならざる點多く、Fay も彼を以て「政治人物中の最も謎多き一人」と述べて居る。勿論最近二個の重要なる著述が殆んど同時に現はれ墺皇儲の人物開明に貢獻した（Sosnosky, Franz Ferdinand, der Erzherzog-Thronfolger. München. 1929. Chlumecky, Erzherzog Franz Ferdinands Wirken und Wollen, Berlin. 1929）。とに角彼は多くの人からは、活動的なる政治家と考へられ、彼によつてオーストリアの活潑なる政策が期待されて居た。而して彼はドイツ人、ハンガリア人の外にスラヴ人を同等な地位に置いて所謂三元王國の實現を計つて居たとされる。これは墺領スラヴ人にとつては有利であつたが、全南スラヴ人統一の主義には大なる障害であつた。彼はセルビア愛國主義者よりは、セルビアの敵と考へられて居たので、其の三元王國實現の曉には大セルビア主義は消滅すべき運命にあ

るこされた。Jevtitsch 曰く、「既にフエルヂナンドの三元主義は視野の中に有り、そは遲鈍なるクロアシア人民にとりては、クロアシアの要求の實現、クロアシア王國の復興、凡ゆる政治的、法的方面に於ける支配者、ドイツ人、ハンガリア人との同等を意味せん、而して三元主義の實現は疑ひもなく、國民的 Omladina（全セルビア人の統一を目的とせる秘密結社、一八六〇年頃創立、急進黨を生む）のイデオロギイの死であり、全南スラヴ人解放、統一の理想の死なり」。斯くして大セルビア主義實現の障害たるべき墺皇儲を亡き者にする事は、ヂミトリエヂッチにとつて必須と考へられた。而して皇儲暗殺の必要がベルグラードの Komitadschis 又は學生の階級、セラエヲに於ける Mlada Bosna の連中、或はアドリア沿岸地方に於て、其の他外國に於ける青年ボスニア學生の一派によつて主張されて居た事は、此の事件が以て單なる特殊、獨立のものでなく、大セルビア主義運動と最も密接な關係にあるを示すものである。されば墺皇儲がセラエヲへ行くと否とに拘らず、早晩何人かの手によつて殺される運命にあつたのである。其の因つて來る處遠く且つ廣く、特殊原因を何等か主張するが如きは、事の眞相を最も知らざるものである。（未完）